

軍と争っていたため蒋介石軍は日本軍が引き揚げたら、兵器・弾薬・資料等は共産新四軍にとられてしまう可能性があると判断していたようでした。そのため、日本軍を頼りとし、武装解除しなかったといえます。

中国集中衛での食料等は蔣軍から支給され、あまり不自由はありませんでした。使役には、道路工事に一、二度出されましたが、その時は蔣軍がついていて被害を与えることを防いでいましたし、食料の支給も最後まで続けてくれました。

我々の居住はお寺であり、付近の住民のマラリア患者には、日本軍が薬を与えたりしていたので、日・中国の関係は軍・民共に良好でした。

我々は八月に集合し、帰還は昭和二十一年二月二十日、上海から米軍LSTで博多上陸、部隊はほとんどが同じ船への乗船でした。戦後、中国へ旅行し、現地人と再会した人もいます。

## 独立山砲第二大隊

### 湘桂作戦衛生隊

佐賀県 福島 春雄

大正十二（一九二三）年八月十日、佐賀県有田村黒牟田で生まれ、父は製陶業（登り窯）を営んでおり、私は高等小学校を卒業すると、戦時色も強くなり、おのずと勤務先は兵器関係が多く、陸軍造兵廠に勤務することになりました。仕事は、万能フライス盤という工作機械を操作していたのですが、徴兵適齢期となり昭和十八（一九四三）年六月検査の結果は甲種合格でした。上司の山本兵技大尉に申告し、造兵廠を退職したのです。普通考えますと、兵役という公務につくのですから、現役兵となるので退職しなければならなかったのです。

昭和十八年十二月十日、福岡の東公園に集合を命ぜられ、そこには、初年兵受領者が来ておりました。

我々は、入隊では無く「集合せよ」ですので、そこで軍服・長靴を支給されました。十二月十八日早朝、博多港を出港、夕方、朝鮮の釜山港入港上陸しました。同日、直ちに軍用列車にて京城へ、翌朝は、鮮満国境、山海関を通過、というスピード輸送でした。昭和十八年の末ですから、満州も、北支も当然戦地です。その為か、軍用列車の前後には歩兵が一個分隊ほど、警乗していました。

その時、我々軍用列車に対し匪賊による襲撃があったのですが、我々初年兵は兵器を持っていなかったのです。警乗兵が応戦し撃退してくれ、列車には被害はありませんでした。我々も、やはりここは戦地だな、と実感したものです。

北京に着いて給食を受け、天津から津浦線で、揚子江北岸の浦口に到着、川を渡河し南京着、城内に入り兵站宿舎に二泊、三日目には、同行した幹部候補生十数人と別れるという、まさに急行軍というか、緊急輸送の感じがありました。

続いて、南京より漁船のような船で揚子江を遡航、九江を経て武漢に着き上陸しました。しかし、我々の船は後日、初年兵を乗せて帰る時、空襲を受け爆沈させられたといえます。揚子江は大河ですから、武漢までは三千トン級の船が航行できるし、この揚子江には「淡水イルカ」が泳いでいると、船員に教わりました。

その時は、常徳作戦が開始されており、まさに、揚子江の武漢より上流や洞庭湖は戦場でした。我々は、中支軍（第十一軍―呂集団）の独立山砲第五十二大隊の要員であるため、武漢大学にある兵舎に入隊しました。当時、本隊は常徳作戦参戦中で、留守部隊でしたので、私達、初年兵は、正月、部隊が帰って来た一月五日に正式に入隊しました。

本隊が帰って来た時、その服装はポロポロでした。我々初年兵は支給されていた服を脱いで、ポロポロ服と交代、服も長靴も返納させられました。今度支給されたのは古い服で、修理したのや、血痕のあるものもありました。

私達の教育は、青年学校だけで、山砲の教育は初めてでした。初年兵は各隊の内務班に編入させられました。班内での私的制裁のため凍傷になっていました私は、今でも右手の付け根の所に跡があります。山砲は、馬の手入れをするので、馬糞をいじる時は、温かかった。汚いなどではなく、温かい感じが今でも私の感触として残っています。凍傷や、傷が付いていても、リバノール水に手を入れて消毒する程度でした。初年兵教育中は、一月、二月ですから寒かったです。

一期の検閲は、私は衛生兵でしたが、兵科の教育でした。衛生兵の専門教育は武漢大学の病院で受けました。しかし、近いうちに作戦があるというので帰隊しました。

独立山砲第五十二大隊の兵舎は、漢口の対岸の武昌にありました。大隊は二個中隊、中隊は、四一式山砲二門、それに軽機関銃がありました。それに、通信、観測、第一、第二戦砲隊、弾列であり、一個中隊は百人くらいと記憶しております。

私の、参加した作戦行動を簡単に回想しますと、大

略次の如くであります。

独立山砲第五十二大隊は、呂第五五一五部隊であり、

昭和十九年一月五日 本隊、常德作戦から帰隊

昭和十九年四月 初年兵第一期検閲終わる

昭和十九年五月 湘桂作戦、都安作戦

昭和十九年六月～八月

湘封作戦 陵県、安仁の戦闘（一週間程度）補給不可能、携行弾薬のみ

昭和十九年八月～十月

湘桂作戦、東陽及び道県進入戦闘

昭和十九年十月～十二月

桂林・柳州飛行場攻略、追撃と東安、全県反撃

昭和十九年十二月

次期作戦準備、竜頭村駐留、補充兵追跡

昭和二十年五月 独山・宜山・重慶作戦北上中

昭和二十年八月 停戦、九月、反転作戦武昌地区金

口鎮集結

昭和二十一年五月 内地博多港復員帰郷

### 独山回想記

短期、現役初出陣、独立山砲兵第一線將兵として警備作戦、戦闘と猛追撃、連戦連勝、行動は夕暮れ、夜間進撃、戦闘、敵の銃弾射程集中。

敵地観測、陣地構築、砲列火を吐き望樓塔に命中。

同時連発、散発、歩兵の追撃、突入勇敢な古兵奮戦、実戦の体験、身にしむ軍人の本分、ここに有りと実感する。

我が軍の行軍は時速六キロ行軍の強行軍、破竹の勢、強い、強かった。よくぞ、この身、この足で、敵前渡河等、不思議に感ずる。特に反転作戦に強力な敵兵と激戦、撃退して、待ち受けた。工兵隊、橋梁、爆破、破壊、後退、撤退作戦難かしかったと思う。

歩け、歩け、やっと命からがら宿营地へ、貴様も俺もズンダレか。

我が身ポロポロ、近隣の人皆、不肖の計報噂聞く。入営時とは裏腹、復員軍人として入院する。忘却、

いまだ、まぢまぢ生死をさまよう兵士、マリアの熱病、水、水をくれの連呼、あの声、いまだに忘れ得ぬ。力尽き、「お母さん、お母さん!」、最期の声は「天皇陛下万歳!」と、かすり、やむ。嗚呼、軍人の哀れさよ、まぶたが涙で浸みる、死して護国の楯となる。

今、我れ生還し喜寿の歳月を迎えぬ、戦友よ、英靈よ安らかに、靖国の神と成り給う。面影偲びつつ御冥福を祈り、余年を美しく生きる、平和な日本の二十一世紀へ躍進しよう。

このように回想をまとめてみましたが、引き続き、私の戦争体験を話し続けてみます。

安仁攻撃は湘桂作戦の緒戦でもあります。安仁には、敵の連隊があり戦闘をしました。雨季のため補給がつかぬので携行弾薬だけで戦うのだが、弾薬が底をついてしまった。敵は落下傘爆弾で攻撃してくる。馬も散開させねばならなかった。馬が被害を受ければ、砲も弾薬も運ぶことができない。内務班内では将校や

分隊長にピリピリしていたが、戦いでは「初年兵は伏せろ！」と言われました。いざ戦闘になると、指揮官や分隊長は違うな、と思いました。

私は、中隊長のそばで、戦闘になると砲列についていました。安仁では、野戦病院も近かったが、小隊で五、六人死んだので家を壊したが、死体を茶毘にするのは我々の仕事でした。

負傷者は病院に送るのだが、軽傷者には「赤チン」、重傷は「ヨーチン」、病人には煮沸した水を飲ませました。クリークの水は絶対に飲ませません。マラリア患者には硫酸キニーネ、熱の高い時には、黄色キニーネを飲ませるのですが、薬は携行したものでだけで補給はありませんでした。

一週間、塩が無かったので、塩なし食事でした。しかし、馬には岩塩を食べさせました。補給は、道県、全県で若干はあったが不自由でした。砲馬が不足するので、乗馬を砲馬にして、全部夜行軍、山から山へ、谷から谷へと行くので、馬が腰をやられると使いものにならなくなります。また、渡河の水馬で、馬の頸を

上げてやり、耳に水が入らぬようにしていました。山砲は歩兵の援護だから、重要な任務を持っています。安仁では敵の迫撃砲攻撃を受けたので、馬を逃げさせて被害をなくしました。

安仁では望楼があり、これが、見張所でありトーチカです。そのため歩兵が進めないで、連絡を受け、山砲が砲列を敷いて撃つが、敵は山砲の方へ、機関銃・小銃弾を集中して狙ってきます。そのうち、経験をしてくると、弾道が近いか、遠いかが分かってくる。中国軍の戦死者が積まれている所、ウジのわいている所を通って攻めて行かねばならなかったのです。

渡河の時は、工兵が待っているので六キロ行軍であり、また、反転の時も六キロ行軍だから苦勞しました。我々は、柳州・桂林が陥落した後に入りましたが、放棄した飛行機の残骸を見ました。地雷は、歩兵が先に行くから、我々はかからなかったので助かりました。

竜頭村の部落の防壁が泥のれんがで積んであり、一

時駐屯し、負傷者を後送しましたが、ここへ、古参の召集補充兵が何人が配置されてきました。何しろ、山砲隊兵力が段々と減少していきましました。我々衛生隊は「衛生材料」や「軍事功績書類」を馬に積んでいました。負傷者は比較的少なかったが、マラリア患者が多かった。軍医だけでも三人が後送されました。

その後、独山攻撃ですが、中国軍主力は、貴州省へと後退して行ったのを追撃しました。我が軍は補給が無く、現地自給、現地調達のみでした。そのため、夜行軍、早朝攻撃占領だから、朝食用の飯が炊けてあるのを頂くこともあり、半煮えなので油で仕上げるとか、また炊かねばならぬ時もありました。いずれにしても、現地調達で貴州まで行かねばならぬのですから苦勞したのです。

五月になると、軍から撤退の命令が出て、武昌、南京へ向け出発しました。進攻も急行軍でしたが、撤退もまた強行軍でした。せっかく占領した貴州省も撤退とは、と我々は思っていたのですが、今度は、送り狼

の多い、貴州・広西省出の撤退作戦でした。敵は、既に、米式装備に変わっての追撃ですから、我々遠征軍は苦勞をしたものです。

八月には、武昌地区の金口鎮に集結したのですが、その間、強行軍中マラリアや下痢で歩行困難になった者などから、「置いて行ってくれ」「殺してくれ」と言う者もいました。中には、出発前、爆発音がしたら自ら決していた者もいました。「衛生兵！」と呼ばれても、もう手をつけられない状況で死んで行った人もいました。

水も飲ませられず、意識もうろう、「殺してくれ」と言う。戦闘より行軍は辛いものです。兵隊の本領を、一に剣術、二に射撃と言いますが、三の行軍が、作戦中最も大切に辛いものでした。日本軍は補給がなく、兵器・弾薬はもちろんであるが、自分で食べるものも、着るものも、自分で背負って、自力で歩いて行かねばなりませんでした。

外地で作戦行動に参加した人は、必ず、戦闘より行軍が辛かったと、述懐しています。進攻作戦より撤退

作戦はなお辛い、反転行軍にも命をかけていました。落ちる兵隊もいる。「殺してくれ」「置いていってくれ」という兵隊を何とか連れていくのに苦勞します。特に、軍医や衛生兵は、兵器も持たず、弱兵と単独行動は困難なのです。

結論は、戦争は補給なのです。戦闘は行軍でありま

## 若い志願兵の

### 湘桂撤退作戦まで

石川県 三宅 良

私の実家は石川県松任市菅波町、武田姓であり、男三人、女二人、五人家族の農家であったが、兄は軍隊に行き、台湾勤務でした。留守は姉・妹・弟で、私は高等小学校を卒業し、名古屋の国鉄養成所で勉強をしておりました。しかし、養成所は三年制のため幹部候補生にはなれないということでした。

その頃、役場の兵事係から、「君は二男だから志願したら」と言われました。その頃は、男はどうせ軍隊へ行くのだからという状況でした。配属将校も「軍隊へ行け、早い所行って、お前達は死んでしまえ」と、今思えばずいぶん乱暴な話ですが、国鉄養成所でも機関関係をやっていたためか、軍隊訓練を重点にしていたのです。特に、配属将校の権限は強かったのです。いくら、鉄道省関係の養成所といっても、軍隊の命令の方が優先してました。

当時、徴兵検査は、大正十三・十四年生まれが同じ年の昭和十九（一九四四）年に実施される程、兵員を必要としていたのでしょう。私は大正十五（一九二六）年生まれでしたが、志願をしました。昭和十九年七月、石川郡と松任町の者が一緒に、松任で検査を行われました。

私の体重は五〇キロを切っていたのですが、身長は一六二センチ、胸囲は狭いと言われたのですが、「第一乙種合格」となりました。しかし、入隊は遅いだろうと思っていたのですが、九月八日に現役徴集の知ら